

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<https://kakio-kyoudo.jp.org/>

第 201 号

古老は語る

宮野薫さんのお話 7

岡上の人々と戦後の暮らし (その 1)

(聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員))

* 終戦直後、厚木基地の滑走路の拡張工事に岡上在住で一級上の A・K さんや T・E さん等が行った。

・ 1945 (昭和 20) 年 8 月 15 日以降、徹底抗戦を主張する司令小園安名海軍大佐のもと、海軍厚木航空隊 (302 空) は複数の将兵がビラの配布や散布を行うなど、軍令部の意に背き反乱の姿勢を示していた。



滑走路にばら撒かれた戦闘機のプロペラなど (古川編・中山著『昭和の快男児 日本を救った男 安藤明』より)

そうした中、日本駐留を目指す連合軍側は最高司令官マッカーサー隷下の部隊が厚木に進出することを通告して来ていた。しかし、滑走路や周辺には連合軍を妨害するために 302 空の将兵が放置した多数の航空機やその部品類が散らばっていた。

この混乱状況は小園と同期の佐藤六郎大佐の指揮のもと、軍の重量物運搬を担当していた大安組社長・安藤明配下の 200 名余の作業員による 25 日夕刻から先遣隊の到着の予定となっていた 26 日払暁までの作業によって辛うじて解消した (古川圭吾編・中山正男『昭和の快男児 日本を救った男 安藤明』(講談社出版サービスセンター、2003 年)。岡本喬『海軍厚木航空基地』(同成社、1987 年))。

マッカーサーは台風の影響で予定より 2 日遅れた 8 月 30 日、厚木に到着した。その 2 日前に、テンチ大佐指揮下の米軍先遣隊が障害物の撤去された厚木飛行場に飛来していた。

厚木基地が米海軍に正式に接收されたのは 9 月 2 日。直後には飛行場としては使用されず、米陸軍キャンプ座間の資材置場など輸送基地の役割を担った。だが 1950 年 6 月の朝鮮戦争勃発により、極東地域に海軍航空基地が必要となった米軍が滑走路や施設の復旧整備に着手。同年 12 月には米海軍第 7 艦隊所属艦載機の修理、補給、偵察などの後方支援の「米海軍厚木航空基地」が発足した (厚木市 HP「厚木基地の沿革と概要」)。

ジェット機に対応するために 1957 年にも滑走路の整備拡張が行われたが、薫さんの記す「拡張工事」は、「終戦直後」と言えるかどうかは微妙なものの、1950 年の整備工事だろう。

どのような経緯で求人があったかは分からない。当時、薫さんの 1 級上のお二人は 20 歳を少し出たばかりの若者だった。1 週間くらいの作業に行ったようだとのことである。

* 昭和 24・5 年頃神社の祭りに青年団で梨を売る準備をしていたら露天商がやってきて「誰の許しをもらって、こんな店をするんだ」と脅かされたことがあった。けれど、青年団の仲間でもよく遊んだ友達でもあり、近所に住む 2 級下の T・E さんが「顔」の広い人だったので、露天商に話をつけてくれて梨はなんとか無事に売ることが出来た。

・ 梨は登戸の方で仕入れたもので、収入は青年団の旅行などに使ったとのこと。販売は岡上神社の祭礼で毎年行ったわけではなく、その時だけだったそうである。

・ 柿生の青年団活動は出征兵士壮行の際の楽隊 (「柿生文化」199 号参照) など、戦前から活発に行われていた。1919 (大正 8) 年 3 月に「柿生村外一ヶ村組合青年会」が発足 (「柿生村外一ヶ村組合青年会々則」(義胤小学校編『柿生村 岡上村郷土史』(1932 年) 所収) 及び「コラム 青年団発足」(小島一也『麻生郷土歴史年表』2009 年、p.125))。会則第一条に「教育勅語戊申詔書ノ聖旨ヲ奉戴シ」とあるとおり、1915 年 (大正 4) に文部/内務省共同で発出した青年団体育成に関する訓令などの国策に沿うものだった。

・ 戦後は、行政の補助金を受けるものの、青年団は自主性の確保に注力する。柿生地区では 1947 (昭和 22) 年 1 月に「柿生^男青年団」による「結団記念号」と銘打つ機関誌『団結』を刊行。同年 9 月のカスリン台風で被災した多摩川周辺の自治体のうちの葛飾区に対しては「川崎市柿生青年団」から「甘薯、押麦 133 貫 (約 500kg)」を支援するなど (東京都総務部文書課編『昭和二十二年九月風水害の概要』(47 年 12 月))、戦後早期から新たな活動を開始している。1950 年代にはガリ版刷りの会誌『若草』を発行して随筆や短歌、俳句などを多数掲載したほか、陸上競技会 (「俵かつぎ」も競技の一つ) の成績など、団の多彩な文化活動を録している。梨販売もそうした団活動の一端であった。

(続く)

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 11

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(11)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

近代の旅行案内書にみる禅寺丸柿

今回は、明治・大正・昭和初期に出版された旅行案内書(旅行ガイドブック)から禅寺丸柿がどのように紹介されていたかを探ってみることとした。明治後期に入ると鉄道の発達にともなって、東京在住の紀行作家によって東京近郊の名所・旧跡などを紹介した旅行案内書が数多く出版されるようになった。鉄道会社も遊覧にでかける人達を、いかに自社の鉄道を利用してもらうかの手段として旅行案内書を発行している。

- ① 遅塚麗水著『京濱遊覧案内』(京浜電気鉄道(株)、明治 43 年)は、「驛に近き柿生村は、每家皆柿を栽ふたり、四方數里、數萬株あり、秋霽の丘に登りて聘望すれば、累々たる枝々の實、日に耀やきて紅酣し、朱燃え、脚下に珊瑚の海を開く、柿見物と呼びて、此の奇觀を賞するの人多し、味も亦た甘美、王禅寺柿、又は禅寺丸の名世に高し」と、出かけてみたくなるような錦秋と柿の景観で誘っている。
- ② 落合浪雄著『郊外探勝 その日帰り』(有文堂書房、大正 3 年)は、梅、桃、桜、ツツジ、藤、菖蒲、菊、牡丹など、東京近郊の花の名所を紹介した旅行案内書。都筑郡関係では、都田村川和の豪商中山恒三郎家の菊園「松林園」を菊花壇の写真入で紹介する。禅寺丸柿については触れられていない。
- ③ 田山花袋著『東京の近郊』(実業之日本社、大正 5 年再版)は本文 701 頁に及ぶ厚い本である。大正期に入っても都筑の丘は旅行案内書にほとんど登場しない。このことについて田山花袋は、「あの丘陵の中は確かに面白い。鶴見川の谷も頗る世離れた感じがする」と述べ、さらに「兎に角、この鶴見川の谷は、南郊を跋涉するものゝ是非一度入って見なければならぬものであると私は思ふ」と推奨する。都筑の丘は外からの人が踏み入っていない土地で、出かけていく必要性を説いている。田山花袋自身もまだ都筑の丘には踏み入っていないようである。このためか禅寺丸柿については、「横濱線」の項で「柿生村は柿の名所として聞こえてゐる」と簡単に片付けている。他に鳥山の三会寺、小机城址、泉谷寺、川和の菊、王禅寺、下麻生の不動尊と、その名称と距離だけを記し、細かな説明をはぶいている。
- ④ 石井茂二郎著『名勝史蹟案内 横濱横須賀』(大洋堂書店、大正 7 年)には、横濱線沿線の小机城址、折本の貝塚、川和の菊園、印融上人の墓、杉山神社、恩田糟屋氏の五輪塔、不動尊、下麻生の古墳址などとともに王禅寺と禅寺丸柿について「また寺の附近は柿の名所であって、老柿實に幾萬本と云ふ。秋は頗る美觀を呈し、為めにわざわざ杖を曳いて来るものさへある」と、あるがままに紹介している。
- ⑤ 田中伸著『東京附近のハイキング』(朋文堂、昭和 10 年)は、「柿生の丘ハイキング」コースで、新宿駅からの日帰りコースとともに「東京附近でも柿の名所であり、地名まで柿生と言ふ此の都筑の丘への散策の手引をしよう」と、言葉少なにコースを紹介している。

今回取り上げた旅行案内書の中で『京濱遊覧案内』と『名勝史蹟案内 横濱横須賀』からは、著者が禅寺丸柿について実地踏査をした上で執筆した様子が読み取れる。この外に教育者・郷土史家の角田政治著『続大日本地理集成 交通名勝地誌』(大正 9 年改訂)になると、都筑郡の項で「特に挙ぐべき名所 舊蹟なし」と全く素っ気ない。また河井醉茗著『東京近郊めぐり』(大正 11 年)も溝口から長津田への大山街道沿いについて「特にこれといふ名所はない」と簡単に片付けている。実際に現地を訪れたのであろうか。

禅寺丸柿は、梨狩りなどのように東京近郊の観光農園として発達せず、主に京浜市場へ出荷をしてきたため、観光客を誘致する対象ではなかった。「柿見物」と呼んで紹介されたことが、せめてもの救いであろう。

(続く)



1918 年刊『名勝史蹟案内 横濱横須賀』筆者蔵

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1 ナイチンゲールの世界 (17)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

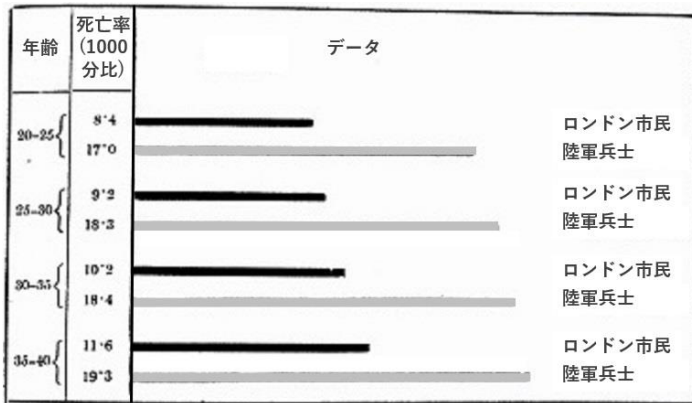
統計学者ミス・ナイチンゲールの誕生

もう少しフローレンスの作成したグラフの話の続けさせていただきます。

「柿生文化」199 号で記した「蝙蝠の翼」のグラフは、戦地における英国軍兵士の原因別死亡率を示すもので、兵士の死亡原因のダントツの 1 位が、戦死ではなく戦病死であることを明らかにし、戦地病院と露营地の衛生環境の改善を訴えるものでした。一方でフローレンスの思考は、さらに大きく翼を広げていたのです。彼女は戦地のみでなく、本国や植民地などに広く存在する軍施設の環境や国内の貧しき人々の生活圏、いわゆる貧民窟の生活環境の改善にまで、踏み込むことを意識していたのです。

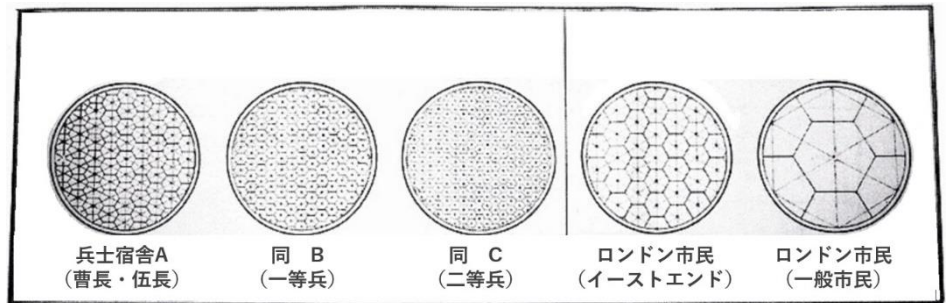
以下に掲げる棒グラフは、クリミア戦争の開始以前の 1849 年～53 年までの 4 年間の男性一般市民 (以下一般市民と略記) と陸軍兵士の死亡率を年齢別に比較したグラフです。クリミア戦争開始直前の時期を選んで、兵役可能年齢である 20 歳～40 歳までの男子を、25 歳まで、30 歳まで、35 歳まで、40 歳までの 4 区分で比較しています。グラフは上段が一般市民、下段が陸軍兵士の死亡率

(千分比) を示す棒グラフです。このグラフも原典では黒と赤の二色で示されているのですが、ここでは黒インクの濃淡でご勘弁ください。グラフを見ると、死亡率は年齢構成が上がるにつれて兵士も一般市民も緩やかに上昇してゆきますが、兵士の死亡率は 20 代の 2 区分では、どちらも一般市民の 2 倍に達しており、30 代前半では 1.8 倍、同後半でも 1.67 倍となっており、兵士の死亡率が圧倒的に高いことが分かります。



英国市民と陸軍兵士の死亡率比較 (1849～1853)

このグラフから陸軍兵士の生活環境が一般市民の生活環境に比べて劣悪なのではないかという仮説も立てられるのですが、フローレンスはより説得力を増すために、市民と兵士の生活環境の差異を具体的に示すものとして、両者の居住空間に着目したのです。国勢調査の分析を主に担当していた統計学者ウィリアム・ファー博士が、彼女の協力者だったことを思い出してください。ファー博士の協力で、フローレンスは巨大都市ロンドンにおける一般市民の 1 人当たり平均的居住面積を入手することが出来、兵士のそれとを比較するグラフを作ることが出来たのです。単純化すれば 6 畳 1 間に何人の人が暮らしているかの比較です。下の 5 つ並べた円グラフをご覧ください。5 つの円はいずれも同じ面積の居住空間を示します。円の中に小さな六角形が描かれています。この六角形が 1 人の人間の居住空間なのです。左側の 3 つの円が軍規格による 3 タイプの兵士キャンプの人口密度を示し、右側の 2 つの円がロンドン市民の人口密度を示しています。2 つの円の左側がロンドンの悪名高い貧民窟イーストエンド (かつての東京の山谷や大阪の釜ヶ崎にあたります) の人口密度を示しており、右側が高級住宅街を除くロンドンの平均的人口密度を示しています。左から 3 番目、全体の中央に置かれたグラフでは、いったい何 10 人の兵士が狭い空間に押し込められているのか六角形の中に打たれた点(この点が 1 人の人間を示しています) の数を数える事すら難しいですね。全員が身体を横にして休むことは勿論、皆が同時に座ることもできない、まるでラッシュ時の満員電車状態に見えてしまいます。



陸軍兵士とロンドン市民の人口密度比較

このグラフの印象も強烈でした。グラフは、この劣悪な生活環境こそが衛生状態の悪化を放置することに繋がり、兵士の死亡率が高くなる大きな原因になっているとする、フローレンスの主張の正しさを強く印象付けたのです。こうして兵舎の改築を含む兵士の生活環境の改善計画が動き出すことになったのです。

(続く)

シンポジウム 小島一也没後 10 年 ～ 今小島氏の業績を振り返る ～ ご報告

11月17日(日)に開催した表記のシンポジウムでは、新潟県の新発田から駆けつけてくださった史料館建設の旗振り役だった板倉元校長がトップバッターを務め、史料館建設の苦心談と旧柿生村地域の文書史料や民俗資料蒐集の在り方についてお話下さいました。続いて教育委員会文化財課の新井学芸員から、小島先生の著書の特徴と特異性についてのお話と、史料館開設当時、市民ミュージアムに学芸員として出向していた関係から、面談に見えた史料館開設推進委員の皆さんから、貴重な史料ばかりを狙い撃ちしたような貸出要請を受けて苦慮した打ち明け話を伺わせていただきました。修廣禅寺の菅原前住職からは、修廣寺と小島氏及び小島家との浅からぬご縁を大きな模造紙に記した関連図を使って分かりやすくお話下さり、若き日の小島先生の好奇心溢れる姿を、眼に見えるかのようにお話しいただきました。最後に小島先生の後継者として柿の実幼稚園園長を務められる小島澄人氏と奥様で小島先生の長女敦子様から家庭での小島先生の姿を語っていただきました。初対面の澄人氏に、いきなり地域の歴史の話をとくとくと語ってご機嫌だったこと、時間があれば座卓に座って鉛筆で書きものをしていたとお話など、いかにも小島先生らしいと、出席者一同納得して伺いました。パネラーのお話後、フロアの方々からも小島先生の思い出を語っていただき、企画した支援委員一同、創立15年目を迎える史料館を、より充実した施設にしていかなばと決意を新たに致しました。



パネラーの各氏

柿生郷土史料館 第 97 回カルチャーセミナー

夏菟共同塾と義僊師・祖関師

～若者に学びの場を提供した修廣寺の先達～

講師：菅原節生氏(修廣禅寺前住職)
 日時：3月16日(日)13時30分～15時30分
 会場：柿生郷土史料館(柿生中学校内)
 特別展示室
 参加費：無料 どなたでも参加できます。

明治期の柿生村には、5校の尋常小学校(4年制)がありましたが、卒業生が勉強を続ける際に進学する高等小学校はなかったのです。柿生村における高等小学校の誕生は明治32年(1899年)に高等柿岡小学校が誕生するまで、待たねばならなかったのです。校舎の完備した高等義胤小学校が誕生するのはその3年後明治35年(1902年)のことです。この間、学びの意欲に燃える子どもたち・若者たちを受け入れ、柿生地域の中等教育を担ったのが修廣寺の僧侶たちでした。

修廣寺前住職の菅原節生師をお迎えして、明治20年代～30年代初めにかけての修廣寺での学びの様子を、当時の記録を参照しながら振り返っていただきます。ご期待ください。

柿生郷土史料館 第 98 回カルチャーセミナー

治水と利水

～麻生川・片平川と三沢川～

講師：菊地恒雄氏(日本地名研究所事務局長)
 日時：4月26日(土)13時30分～15時30分
 会場：柿生郷土史料館(柿生中学校内)
 特別展示室
 参加費：無料 どなたでも参加できます。

昨秋『再考二ヶ領用水』を上梓された、日本地名研究所の菊地恒雄先生をお迎えして多摩川と鶴見川に挟まれた地域の人々が、どのように河川と関わりながら生活してきたのか、川の恩恵を受けながらも、暴れ川の治水に悩まされてきた諸々をお話しいただきます。

皆様ご承知の通り、柿生地域の河川は、表題にある麻生川・片平川だけでなく、真福寺川や早野川もやがて鶴見川に合流するのですが、黒川を流れる三沢川だけは分水嶺が異なり、暴れ川で知られた五反田川などと共に多摩川に合流します。菊地先生が、難しい内容をどのように整理して語ってくださるか楽しみにご参加ください。なお、講演の最後に先生の著書『再考二ヶ領用水』のサイン会を計画しています。著書は史料館で販売します。

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：2月8・15・22日(土曜日) 3月2・9・16・23日(日曜日)
 ◎開館時間：午前10時～午後3時